

# 加藤 凍星（かとう・とうせい）

## 1、プロフィール

俳人。高校教諭。昭和 35 年頃より句作を始め、49 年句誌「渋柿（のち渋柿園）」に参加。52 年頃より鷹羽狩行に傾倒。55 年、第 1 回狩座賞受賞。56 年、第 1 回弘前俳句賞受賞。

<生没>

1935(昭和 10)年9月 17 日～1981(昭和 56)年 12 月 30 日

<代表作>

句集『甕の水』『加藤凍星遺句集』

<青森との関わり>

中津軽郡和徳村(現弘前市)生まれ。津軽地方で高校教員をしながら、句作と普及に努め、渋柿園俳句会代表となる。

## 2、作家解説

昭和 10 年9月 17 日、中津軽郡和徳村大字百田字岡本 10 の2に生まれる。本名、粕美。村立静修小学校、新制和徳中学校、県立弘前高等学校を経て、26 年4月、中央大学商学部に進学した。古典音楽、油絵、囲碁など多趣味な学生生活を送り、33 年3月卒業。

33 年4月から母校弘前高等学校に非常勤講師として勤務。翌 34 年 11 月、県立五所川原農林高等学校に教諭として赴任する。

35 年5月弘高句会(齋藤日出於世話人)に参加し、句作をはじめ。十和田俳句会(増田手古奈主宰)にも入会する。

38 年 11 月、米沢孝子と結婚。39 年8月、長男拓彦誕生。40 年、「氷海」入会。42 年4月、次男牧彦誕生。この頃から、雅号「凍星」を用いる。

46年4月、五所川原農林高校鶴田分校に転勤。49年6月、齋藤日出於のグループが「渋柿」を創刊、凍星も参加する。51年4月、弘前工業高等学校に転勤。

52年1月から「氷海」主宰代行の鷹羽狩行に傾倒。3月から「渋柿」の編集に携わる。53年1月「渋柿」は「渋柿園」に改題。4月、弘前大学付属病院で直腸腫瘍手術を受け、約3ヵ月入院する。8月「氷海」の後身「狩」が創刊され、巻頭を飾る。

55年1月、第1回狩座賞受賞。2月、日出於急逝により「渋柿園」代表となる。8月、肺腫瘍で東北大学付属病院に入院。10月、左肺上葉の一部を残して切除する。11月、弘前大学付属病院に移る。11月20日、現代俳句選書シリーズの第8巻として『甕の水』（東京美術社）が出版される。

56年11月、第1回弘前俳句賞受賞。12月30日、弘前大学付属病院で死去。行年46。「渋柿園」2月号が、＜加藤凍星追悼号＞を組む。

60年11月、5回忌を期し、藤田沈流らによって『加藤凍星遺句集』が、渋柿園俳句会から刊行された。

### 3、資料紹介

○『加藤凍星遺句集』

図書

1985(昭和60年)年11月30日

194mm×140mm

第二句集。五回忌に渋柿園俳句会によって編集刊行された。第一句集『甕の水』発行後、逝去するまでの1年余の闘病生活で作られた、多数の作品から300句が選ばれ収められた。俳句の他に、文章19篇が収録されている。